

7月中旬の連休に、岩手県一ノ関市にある児童青少年福祉施設「藤の園」を訪問した。この施設はドイツのフランシスコ修道会婦人部が運営するもので、ドイツ人の修道女シスター・セリーナが園長をつとめて居られる。3月の震災の時、ドイツのTVがこの「藤の園」と彼女を取材報道した。これを観て感動したミュンヘン在住の私の友人達が中心となり6000ユーロの義援金を集めて下さった。5月中旬に私が所用でドイツに行った折、その額をお預かりし、東京六本木の修道会事務所にお届けした際に約束した訪問だった。

この施設には3歳から18歳までの、親が無いか、親は居ても諸事情で面倒を見てもらえない子供達約50人が生活している。建物は外から見る限り大きな被害は無い様だったが、内部に入ると至る所に亀裂が走り、崩壊の危険が見てとれた。シスター・セリーナのお話によると、4月9日の大きな余震の被害が特に大きかったとのこと。水はやっと出る様になったが、未だお湯は供給出来ない状況とのこと。1960年代に建てられたものなので、この際耐震構造に建て替える計画を理事会で決定したとの由だが、総工費には4～5億円必要なので、とても自力だけでは足りず義援金に頼らねばならない、とのお話だった。

子供達と職員の方々へのプレゼントとして、小さなコンサートを食堂でさせていただき、約40人余の子供達とスタッフの方々聴いて下さった。彼等の気持ちをほぐすために、先ず自己紹介を兼ねて私自身の事、これから演奏する作曲家、J.S.バッハについて話し、特にこれから弾く曲が決して楽しいものではないので、少しの時間、我慢して聴いて下さい、と言って無伴奏ソナタ第3番から「ラルゴ」とパルティータ第3番から「ガヴォット」を弾いた。ここまでは小学生までの子供達に、と考えていたので、この後は中学生以上の人達のために弾きますから小さい人達は出て行って良いですよ、と私が言っても、誰一人として、その場を動かない。そこでパルティータ第2番、特にシャコンヌについて話をし、30分程我慢して下さい、

と言って弾いたが、3歳くらいの障害を持つ男の子が希に声を発したが、その子以外の子供達は熱心に食い入るように聴いてくれたので感動した。

シスター・セリーナはもう20年近く日本各地で福祉活動を続けて居られ、日本語もとても流暢に話される。12月16日には、ここの最大のイベントであるクリスマス会が開かれる、とお聞きし、寄せていただくお約束をした。それまでに、ここの建物の再建のために、少しでも多くの義援金を集めることが出来れば、と願っている。丁度この項を書いている9月初旬、シスター・セリーナからドイツ語の自筆のお手紙が届き、緊急に建て替えが必要となり、全員で同じ施設の中の小さな体育館に引っ越しせねばならなくなり、そのために最も重要なイベントであるクリスマス会も今年は中止となり、諦めねばならぬとのこと、子供達をはじめ近隣の方々や多くの支援者の方々にとっても無念至極の至りである。しかし私は来る10月16日にはミュンヘンの聖アンナ教会で、義援金のためのチャリティー・コンサートを行うことになっている。また同月20日のウィーンの教会でのコンサートもこの主旨で行いたい。